

# 大学生の自律性と生活行動の関連について ー成長過程における情緒的自律性と家族機能の変化ー

○小岡 亜希子 上野真里江 大西里奈  
後藤まりえ 鳥越敬子 西村志帆 村上絵里香  
指導教員：絹谷政江

## I. はじめに

卒業研究をするにあたり、自分たちの4年間の学生生活を振り返ることから始めた。私たち大学生はいつ頃から情緒的に自律できるのだろうかということに興味を抱いた。実際に質問紙を用いて測定し、また自律性の発達が生生活行動や家族機能にどのように関連しているかを知りたい。また大学生だけにとどまらず、中学生や高校生の自律度を測定し、大学生にいたる発達過程の自律性の変化も見てみたいと考えた。

## II. 対象と方法

### 1. 調査対象

A 県内の B 中学校 2 年生 105 名、C 中学校 2 年生 153 名、D 高校 2 年生 120 名、E 高校 2 年生 120 名、F 大学(1 年 50 名、4 年 62 名)112 名の同意が得られた生徒・学生を対象とし、合計 610 名にアンケートを実施した。B 中学校、D 高校、E 高校では担当教員にアンケートの実施を依頼した結果、回収率は 100%であった。C 中学校、F 大学では出向いて実施した結果、回収率は C 中学校では 100%、F 大学 94.9%であった。

### 2. 調査時期

2009 年 11 月～12 月

### 3. 方法

中学生・高校生には合計 1)~4)のアンケートを実施した。大学生には中・高生と同じ 1)~4)に加えて、生活習慣(大学生版)のアンケートを実施した。

#### 1) 属性調査(属性調査票)

性別、家族構成(祖父母の有無、父母の有無、兄弟姉妹の有無)を記入についての記入を求めた。

#### 2) 生活習慣(生活リズム)アンケート

平日における起床・就寝時間や食生活、携帯電話を所持しているか、自宅における夜間の自由時間の使い方などの生活習慣について 11 項目の質問紙を作成し、平日における生徒の生活習慣を尋ねた。また、大学生のみを対象に、進路決定や将来の就職希望先を決定する過程での家族との関わり、下宿生と実家生それぞれのメリット・デメリット、アルバイトの日数・時間・目的について 9 項目の質問紙を作成し、大学生特有の生活習慣を明らかにした。

#### 3) 家族機能尺度(家族力アンケート)

現実と理想の家族機能を測定する尺度で、草田・岡堂(1993)<sup>1)</sup>がオルソン(1985 ほか)<sup>2)</sup>の FACESIII を和訳して作成したものを使用した。家族関係とはそもそも家族 1 人 1 人の感情が複雑に絡み合うものであると同時に、極めてプライベートで、家族以外の人々には明らかにしにくいような様々な事情やいきさつを含むものであり、家族関係を家族以外の外部から客観的に捉えることは難しい。そこで家族関

係の測定道具の開発・研究が進んでいるアメリカで盛んに使用されてきたのがオルソンの開発した円環モデルであり、草田・岡堂が翻訳して作成した尺度である。円環モデルは凝集性、適応性の2つの次元から構成される。凝集性は、家族メンバーが互いにもつ情緒的なつながりであり、極端群・中間群・バランス群に分けられる。凝集性が極端なレベル(非常に高い、あるいは非常に低いレベル)では家族機能がうまくはたらかず、バランス群のレベルでは家族機能がよくはたらくことを意味している。適応性は、家族に状況的危機や発達の危機があった場合に、家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力であり、凝集性と同じく極端なレベルでは、家族のライフサイクルを通して問題が多く、バランス群のレベルでは家族機能が適切にはたらくことを意味している。

#### 4) 親との関係における情緒的自律性(家族関係アンケート)

遠藤ら(1994)<sup>3)</sup>が Steinberg&Silverberg(1986)<sup>4)</sup>の Emotional Autonomy Scale を和訳して一部改作したものを、調査対象者の年齢に合わせて理解しやすい表現に改定したものを使用した。自律性の獲得は、単に親や家族からの精神的離脱、個体化と限定的にとらえず、また、親子関係という1側面からのみ判断されるべきものではなく、それとともにそこから離れた諸関係の側面からも複合的に判断されなくてはならない。Steinberg&Silverberg は①親との関係における情緒的自律性、②朋友の圧力に対する抵抗(自立的意思決定)、③主観的な自己信頼感および自己統御感という3側面から自律性をとらえる視点を提示し、しかもそれらがそれぞれ異なる発達の様相を呈することを実証的に明らかにしている。この尺度は質問項目において、I (individuation)、D (parental deidealization)、N (nondependency)、P (perceives parents as people) という4つの因子から構成されている。Iは“個人化の程度あるいは親とは別個の存在として自分を意識する程度”、Dは“親を理想化しない傾向”、Nは“親に対して依存しない傾向”、Pは“親を人として認識する傾向”という意味を表しており、合計得点が高いほど自律性が高いことを意味している。

#### 4. 分析方法

分析には統計ソフト SPSS Ver.14 を使用し、群間比較は Tukey 法による検定を行い、有意水準は5%未満とした。相関には Pearson の相関係数を用いた。中・高・大学生間の凝集性、適応性および自律性の変化を明らかにすることを試みた。また、大学生の生活習慣と自律の間にどのような関係性が存在するかを明らかにすることを試みた。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. 生活習慣(生活リズム)アンケート

大学生のみを対象とした生活習慣アンケートでは、下宿生(一人暮らし)と実家生それぞれのメリット・デメリット、アルバイトの目的(アルバイト代の遣い道)について、また、中・高・大学生を対象とした生活リズムアンケートでは、夜の自由時間の過ごし方について以下のような結果が得られた。

##### 1)一人暮らしのメリット

一人暮らしのメリットとして、全体を通して「時間の制約がない」「自分の時間が持てる」と回答した学生が80%以上と多くみられた。これは高校生から大学生への生活の変化の中で行動範囲の広まりや自由度の高まりがみられ、自分の都合のよい時間に好きな活動ができるようになったことから、このような結果になったのではないかと考える。

一人暮らしのメリットを大学1回生と大学4回生で比較すると、大学4回生では「時間や空間の自由度が高い」「誰にも気を遣わなくてよい」と回答している学生が多く、交友関係の広まりや行動範囲の

拡大から自由を求めることや自立が進んだことによって、このような結果になったと考えられる。一方、大学1回生では「金銭感覚が身に付く」

「責任感が持てる」「社会性が身に付く」と回答した学生が多くみられ、また「親のありがたみがわかる」と回答した学生も多く、これは1回生が4回生に比べて一人暮らしを始めて間もないことから、今まで親に頼っていたを自覚し始めたためこのような結果になったのではないかと考えられる。

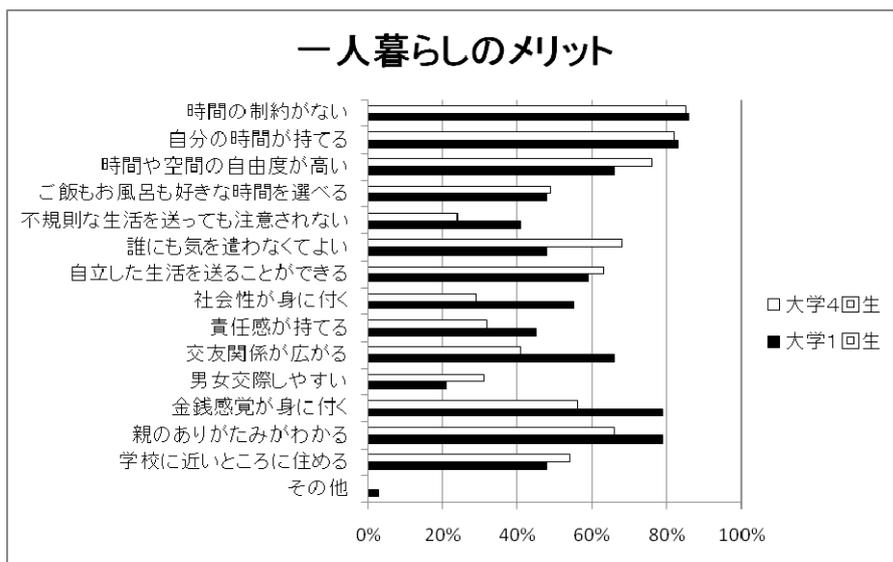


図1. 一人暮らしのメリット

## 2)一人暮らしのデメリット

一人暮らしのデメリットとして、全体を通して「家賃や公共料金などでお金がかかる」「食生活が乱れる」と回答した学生が60%以上と多くみられ、60%近くの学生が「自炊をしなくてはならない」と回答した。「家賃や公共料金などでお金がかかる」と回答した学生が多いのは、大学生になり一人暮らしをすることで、家賃や公共料金などの費用が生活するために必要不可欠であると初めて感じたからではないかと考える。また一人暮らしをすることで、高校生までの親・家族との生活が変化したことにより自炊の必要性や食生活の変化を感じ、生活面でのデメリットをあげた学生が多い結果となったのではないかと考える。

一人暮らしのデメリットとして大学1回生と大学4回生を比較すると、1回生では「アクシデントに巻き込まれる」「安全面での不安がある」、また「看病してくれる人がいない」「寂しい」「精神的に不安定」に回答した学生が多く、安全面や精神面でのデメリットをあげている学生が多くいた。これは、1回生では一人暮らしをしてまだ1年に満たないため、家族と離れて暮らすことによる安全面や精神面への不安をぬぐい切れず、4回生では一人で生活することに抵抗が少なくなり、安全面や精神面よりも生活に密接した経済面への問題を自覚するため、このような傾向が見られたのではないかと考えられる。

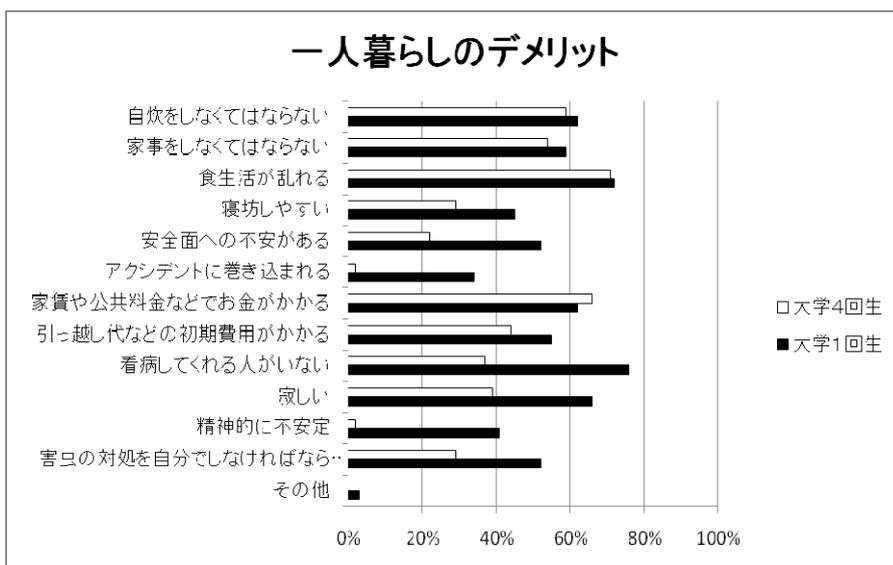


図2. 一人暮らしのデメリット

### 3) 実家暮らしのメリット

実家暮らしのメリットとして、全体を通して「家族が居るので安心感がある」と回答した学生が80%以上と多くみられ、「自炊をしなくてすむ」と回答した学生は大学4回生では70%以上、大学1回生では80%以上と多くみられた。これは高校までの生活環境からの変化が少なく、家族が身近にいることで安心感を感じる学生が多いからではないかと考える。また、自炊を自らする必要がなく、自分のしたいことを最優先にできるという生活面での制約が少ないために、このような結果が得られたのではないかと考える。

実家暮らしのメリットとして大学1回生と大学4回生を比較すると、1回生では「給料を自分のことに使える」に回答した学生が若干多くみられた。これは1回生では高校卒業と同時に初めてアルバイトを始める学生が多く、アルバイトでの収入を自由に使えるという経済面での制約が少ないために、このような結果が得られたのではないかと考えられる。4回生では「親に頼ることができる」と回答した学生が1回生よりも少なかった。

これは4回生の方が交友関係の広まりや学生生活の中での経験の積み重ねから、自分で問題を解決したり、親以外の人に頼ることも多くなったりと、親に頼ることが少なくなったのではないかと考えられる。4回生の方が全ての質問項目において、実家で暮らすことのメリットをあげる総数が少ないことから、社会性が身に付いたことや自律が進んだことが言えるのではないだろうか。

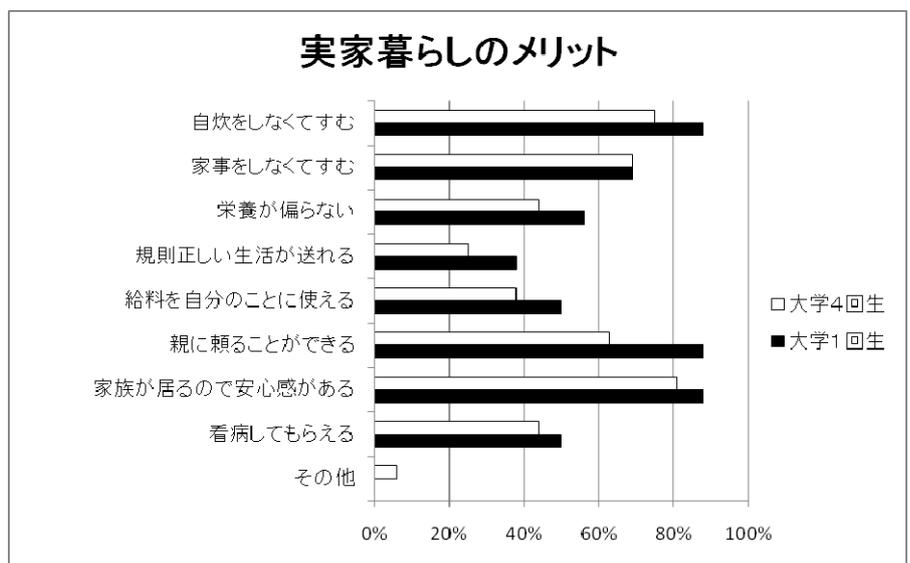


図3. 実家暮らしのメリット

### 4) 実家暮らしのデメリット

実家暮らしのデメリットとして、全体を通して「時間の制約がある」と回答した学生は大学4回生では50%以上、大学1回生では70%以上と多くみられた。これは、行動範囲の広まりと共に自由度も高まることで自らの自由な時間を求めており、帰宅時間の門限などの時間的制約に対して不便さを感じていることから、このような結果が得られたのではないかと考える。

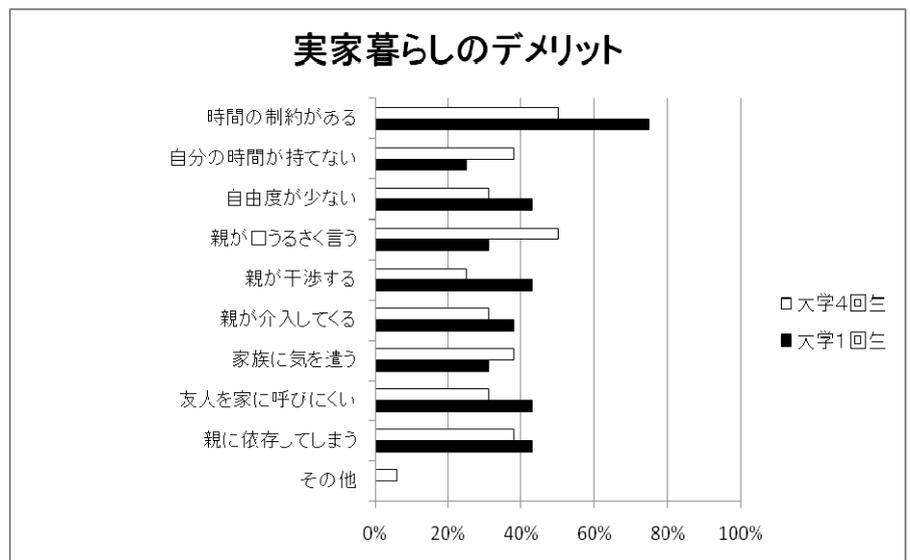


図4. 実家暮らしのデメリット

実家暮らしのデメリットとして大学1回生と大学4回生を比較すると、1回生では「時間の制約がある」「親が干渉する」に回答した学生が若干多くみられた。これは大学入学以前の生活と大学入学後の生活の変化の大きさに親が対応できず、子の生活に関与してしまうことや未成年であることから子の行動に伴う責任が親にあるために、このような結果が得られたのではないかと考えられる。一方4回生では「親が口うるさく言う」と回答した学生が多く、交友関係の広まりや行動範囲の拡大から自由に行動することに楽しみを感じ、自由を求めることや自律が進んだことによって、親の助言を素直に聞き入れ難くなっているのではないかと考えられる。

### 5) バイト代の遣い道

アルバイトの収入の遣い道として、大学1回生と4回生を比較すると4回生では「交際費」と回答した学生が多くみられた。これは4回生が上級生であるため、部活動やアルバイト先などの後輩との関わりの際に出費がかさむなど交友関係の広まりから、アルバイトの収入を交際費に使う学生が多いことがこのような結果に至った要因であると考えられる。

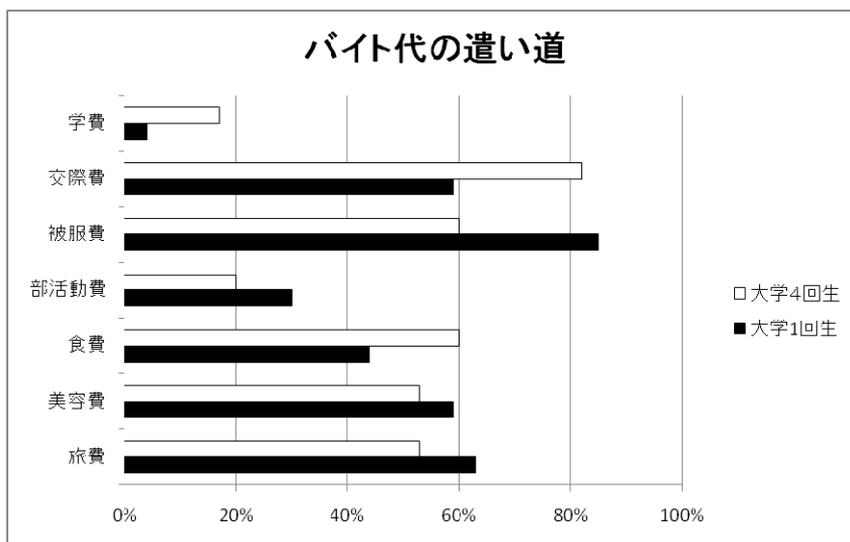


図5. バイト代の遣い道

### 6) 夜の自由時間の過ごし方

夜の自由時間の過ごし方として、全体を通して「テレビ」と回答した生徒、学生が一番多くみられた。

「メール」と回答したのは高校生が多くみられた。これはまず携帯所持率が中学生では42.0%と比較して高校生では98.3%と急増していること（未掲載；手持ちのデータ）、次に大学生は日中自由に携帯を使用できることに比較して高校生は校則で日中は携帯を使用することができないため、夜の自由時間に使用する頻度が高いことが要因として挙げられると考える。

「インターネット」と回答したのは大学生が多く、これは大学生ではレポートの提出などでパソコンを使用する頻度が多くなったことや、それに伴いインターネットを使用する頻度が多くなったことが要因だと考える。

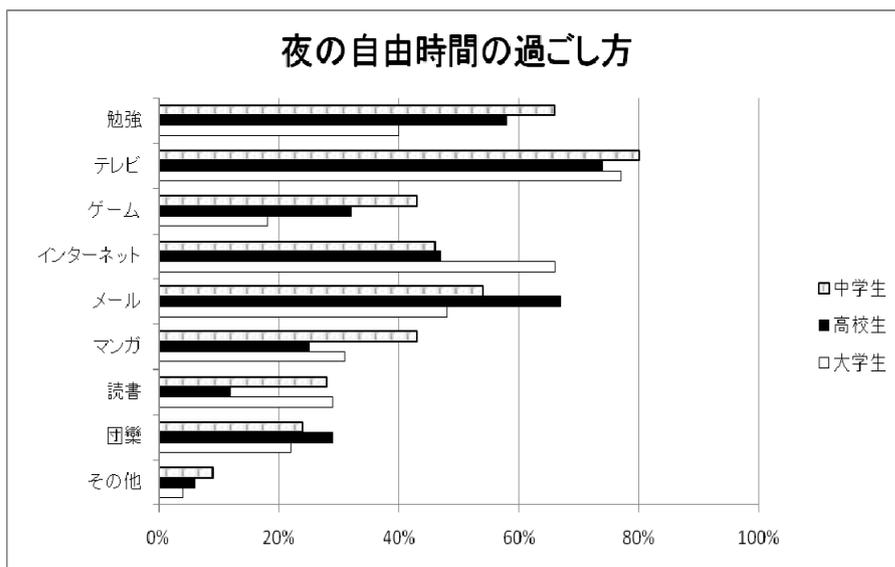


図6. 夜の自由時間の過ごし方

「勉強」と回答したのは中学生、高校生が多く、これはアンケートを実施した中学校、高校の中に進

学校が含まれていたことが影響していると考ええる。

## 2. 家族機能尺度(家族力アンケート)

中学生・高校生・大学生を対象とした家族力アンケートでは、凝集性、適応性別について以下の結果が得られた。

### 1) 凝集性 (表 1)

Tukey test \*  $p < 0.05$

	平均値	標準偏差	有意確立
B 中学	29.835	± 8.605	0.001*
C 中学	34.351	± 8.943	
D 高校	32.903	± 8.465	0.072
E 高校	29.875	± 8.246	
F 大学 1 回生	36.106	± 7.056	0.709
F 大学 4 回生	33.607	± 7.121	
中学	32.620	± 9.049	0.262
高校	31.389	± 8.456	
大学	34.707	± 7.134	

凝集性（家族メンバー間の情緒的なつながり）では、学校間で B 中学と C 中学の間に有意差がみられた。これは 2 つの中学校間に国立大学の附属中と公立中学という環境の差がみられるためではないかと考えられる。C 中学校の凝集性が高い数値を示したことにより中学の平均値が上昇したため、中学—高校間、中学—大学間では有意差が出現しなかったのではないかと考えられる。高校—大学間では有意差が見られ、平均値で比較すると中学—大学間、高校—大学間で差があり、大学生で値が高くなっていた。

凝集性だけをみると大学生で値が高くなっていることより、情緒的なつながりを感じるようになっていと考えられる。これは親と離れる機会が増えることによって親のありがたみを再確認し、家族との精神的なつながりに重きを置くようになるのではないかと推測される。

2) 適応性 (表 2)

	平均値	標準偏差	有意確立
B 中学	26.044	±5.068	} 0.001*
C 中学	29.034	±5.803	
D 高校	28.567	±5.639	} 0.679
E 高校	27.446	±5.434	
F 大学 1 回生	31.085	±7.229	} 0.689
F 大学 4 回生	29.459	±5.439	
中学	27.895	±5.700	} 0.976 } 0.004* } 0.002*
高校	28.009	±5.542	
大学	30.167	±6.272	

Tukey test \* p < 0.05

適応性（家族に状況的危機や発達の危機があった場合に、家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力）では、学校間で B 中学校と C 中学校の間に有意差がみられた。この理由は凝集性の際にも述べた理由と同様であると考えられる。ここでは中学—大学間、高校—大学間にも有意差がみられ、平均値でも成長過程に伴い、値の上昇がみられた。

適応性だけをみると値が高くなっていることより、成長に伴って、家族に守られていた立場から家族の一員として家族を支えることができるようになってきている傾向が見て取れる。

3) 円環モデル (資料 2 参照)

円環モデルでは凝集性、適応性の各次元を低いレベルから高いレベルまで 4 段階に分け、これらを組み合わせて、家族を 16 のタイプに分類している。なお、分類の際には日本語版 FACESⅢの分類基準(草田・岡堂,1993)の数値を参考にそれぞれ 4 グループに分類した。

学校別凝集性・適応性内訳(%) (表 3)

			学校名								
			B 中	C 中	D 高	E 高	F 大 1	F 大 4	中学	高校	大学
家族機能分類	凝集性	遊離	31.9	15.5	15.0	29.5	8.5	14.8	21.8	22.2	12.0
		分散	22.0	23.1	26.5	27.7	14.9	19.7	22.6	27.1	17.6
		結合	27.5	22.3	29.2	25.0	40.4	41.0	24.2	27.1	40.7
		膠着	18.7	39.2	29.2	17.9	36.2	24.6	31.4	23.6	29.6
	適応性	硬直	30.8	16.2	18.6	23.2	19.1	11.5	21.8	20.9	14.8
		構造化	36.3	29.1	25.7	32.1	17.0	27.9	31.8	28.9	23.1
		柔軟	27.5	37.2	41.6	37.5	31.9	42.6	33.5	39.6	38.0
		無秩序	5.5	17.6	14.2	7.1	31.9	18.0	20.0	10.7	24.1

学校別円環モデル内訳(%) (表 4)

		学校名								
		B 中	C 中	D 高	E 高	F 大 1	F 大 4	中学	高校	大学
家族機能分類	バランス群	37.4	36.5	45.9	42.9	39.1	49.1	36.2	47.6	45.7
	中間群	38.5	38.5	31.1	30.7	26.0	32.7	38.0	30.5	29.5
	極端群	24.2	25.0	23.0	20.6	34.8	18.0	25.9	23.3	22.9

資料 2 の円環モデルに当てはめてみると、成長過程が進むに従って家族機能がよく働くというバランス群に集結する傾向がみられた。特に中学—高校間で大きな差があり、この時期に家族の機能性が安定すると推測される。大学 1 回生では極端群の割合が大きくなった。これは図 2 の一人暮らしのデメリットからも 1 回生では一人暮らしをしてまだ 1 年に満たないため、家族と離れて暮らすことによる安全面や精神面への不安をぬぐい切れないことが推測される。このことから家族との情緒的なつながりを多く求めているため凝集性が高値となり、それに伴って極端群の割合が高くなっていると考えられる。

この家族機能尺度(家族力アンケート)では、中学生・高校生・大学生の間に有意な差は得られなかったが、母集団の数を増やして実施すれば有効な結果が得られた可能性がある。

### 3. 親との関係における情緒的自律性(家族関係アンケート)

中学生・高校生・大学生を対象とした家族関係アンケートでは、4 つの因子 (D、P、N、I) とそれらをすべて踏まえた自律性について以下の結果が得られた。

#### 1) D (parental deidealization) 因子 (表 5)

	平均値	標準偏差	有意確立	
B 中学	3.786	±1.437	}	0.439
C 中学	4.160	±1.427		
D 高校	3.270	±1.341	}	0.146
E 高校	3.990	±1.376		
F 大学 1 回生	3.683	±1.430	}	0.542
F 大学 4 回生	3.823	±1.314		
中学	4.007	±1.434	}	0.052
高校	3.106	±1.368		
大学	3.761	±1.374		
				0.011*

Tukey test \* p < 0.05

学校間における有意差はみられていないが、中学—大学、高校—大学間に有意差がみられた。平均値で比較すると中学—大学間では大学の方が D 因子(親の脱理想化)の値が高く、脱理想化が進んでいると考えられる。高校—大学間でも同様に大学生の方で脱理想化が進んでいることが分かるが、中学—高校間では有意差はみられなかった。

D 因子では成長過程において脱理想化が進んでいる結果が得られた。脱理想化とは、例えば親の言うことややることはすべて正しいと思う傾向から、自分自身の考えを持ち親も間違えることがあると考えられるようになることであると推測される。成長発達に伴って親だけではなく多くの他人の刺激や影響を受ける機会が増えることによって、このような脱理想化が進むのではないかと考えられる。

2)P(perceives parents as people)因子 (表 6)

	平均値	標準偏差	有意確立
B 中学	3.809	±1.718	] 0.339
C 中学	4.001	±1.631	
D 高校	4.017	±1.424	] 0.971
E 高校	3.935	±1.624	
F 大学 1 回生	3.542	±1.530	] 0.657
F 大学 4 回生	3.767	±1.420	
中学	3.922	±1.670	] 0.760 ] 0.002* ] 0.011*
高校	3.975	±1.530	
大学	3.667	±1.474	

Tukey test \* p < 0.05

学校間において有意差はみられなかった。中高大で比較すると、中学—大学、高校—大学間において有意差がみられたが、平均値で比較すると中学—大学間、高校—大学間では大学生の方で P 因子(親を人として認識する傾向)が低い結果となっており、他の因子の結果と異なった。傾向としては中学・高校と大学間では自律性が発達するという結果が得られているが、P 因子においては大学生の平均値が低下していた。

P 因子は英語圏で作られた質問項目であり、文化的に日本人には受け入れ難い内容であると考えられる。例えば「親は私が一緒にいる時といない時では態度が違う。」などであるが、これは私たちが英語の原文を日本語訳し、日本人向けの文章に言い換えたものである。元々の文章では例えば「I might be surprised to see how my parents act at a party.」となっており、日本人にはパーティーという習慣があまりなく、回答しにくい質問であったと考えられる。参考とした聖心女子大学論叢 (1994) でもこの P 因子の質問項目は除外されており、ここでも同様の見解があったのではないかと考えられ、私たちも除外したいと考える。

3)N(nondependency on parents)因子 (表 7)

	平均値	標準偏差	有意確立
B 中学	2.587	±1.482	] 0.053*
C 中学	2.945	±1.495	
D 高校	2.912	±1.268	] 0.611
E 高校	2.704	±1.371	
F 大学 1 回生	3.424	±1.331	] 0.903
F 大学 4 回生	3.617	±1.330	
中学	2.799	±1.500	] 1.000 ] 0.000* ] 0.000*
高校	2.805	±1.326	
大学	3.531	±1.334	

Tukey test \* p < 0.05

学校間において有意差はみられなかった。中高大で比較すると中学—大学、高校—大学間において有意差がみられた。平均値で比較すると、中学—大学間では大学生の方が N 因子(親に依存しない傾向)の

値が高く、依存していない傾向にあった。高校—大学間でも同様に大学生の方が依存していない傾向にあった。ここでも中学—高校間に有意差はみられなかった。

N 因子では成長過程に伴い依存性が薄れていく。中学・高校では困難に直面した際、1 番に親に助けを求めることが多いが、大学になると自分自身で解決したり親以外の友人などに相談することが多くなるという結果が得られた。これは大学生が下宿やアルバイトなど家から離れるという環境の変化に伴って親に集中していた依存が周囲や自分に向けられるようになった結果であると考えられる。

#### 4)I(individuation)因子 (表 8)

	平均値	標準偏差	有意確立	
B 中学	3.415	±1.771	]	0.923
C 中学	3.510	±1.644		
D 高校	3.413	±1.400	]	0.964
E 高校	3.474	±1.596		
F 大学 1 回生	3.529	±1.500	]	0.979
F 大学 4 回生	3.637	±1.414		
中学	3.471	±1.698	]	0.803
高校	3.444	±1.557		
大学	3.589	±1.453	]	
				0.345

Tukey test \* p < 0.05

この項目では学校間、中高大間共に有意差が得られなかった。しかし、平均値を比較すると中学・高校と大学間にはわずかに差がみられ、大学生の値が高くなっていた。つまり I 因子（個体化の程度あるいは親とは別個の存在として自分を意識する程度）が大学生では高まっていて、多少ではあるが親と程よい距離感を持つようになってきているのではないかと考えられる。

一方、有意差が得られなかった要因として、I 因子の質問項目に問題があったのではないかと考えられる。I 因子では主に“個体化の程度あるいは親とは別個の存在として自分を意識する程度”についていくつかの質問項目があるが、欧米と違い文化的に自己認識の文化が発展していないと考えられる日本ではこの質問項目はそぐわなかったのではないだろうか。例えば「親は私の秘密を知っている。」や「親は、私が親と一緒にいない時の姿を知ったら驚くと思う。」など P 因子と類似した質問項目が多く、有効な結果が得られなかったと考えられる。

5) 自律度 (4 因子の統合結果) (表 9)

	平均値	標準偏差	有意確立	
B 中学	64.380	±12.071	}	0.470
C 中学	68.414	±13.184		
D 高校	69.518	±9.790	}	0.513
E 高校	66.843	±11.385		
F 大学 1 回生	69.750	±7.821	}	0.125
F 大学 4 回生	73.917	±7.136		
中学	67.063	±12.472	}	0.000*
高校	68.138	±10.539		
大学	72.210	±7.656		

Tukey test \* p < 0.05

D・N・I 因子を統合して考えると、学校間に有意差はみられず、中学—大学、高校—大学間で有意差がみられる結果となった。D 因子の親の脱理想化と N 因子の親に依存しない傾向、I 因子の個体化の程度あるいは親とは別個の存在として自分を意識する程度の値が上がることは自律性が発達することを意味している。

中学—高校間には有意差がみられなかったことから自律の発達する過程は高校生と大学生の間にあると考えられる。中学、高校では家庭環境や生活リズムに大きな変化がないため、大きく自律を進行させる要因が少ないのではないかと考えられる。一方、大学では一人暮らしや変則的な授業、アルバイトなど環境的に自律を求められる部分が多くあり、この環境的要因が自律を促していると考えられる。それに伴い人間関係にも変化がみられ、より多くの人と関わる機会が増えることや、また一方的に教育や保護を受けていた立場から大学進学や成人という立場に伴い、親の教育や保護から部分的に解放された結果ではないかと考えられる。

4. 家族機能と情緒的自律性の関係 (表 10)

		学校名								
		B 中	C 中	D 高	E 高	F 大 1	F 大 4	中学	高校	大学
家族機能分類	バランス群	66.7 (37.4%)	64.9 (36.5%)	67.9 (45.9%)	71.1 (42.9%)	72.8 (39.1%)	72.4 (49.1%)	65.9 (36.2%)	69.5 (47.6%)	72.5 (45.7%)
	中間群	68.2 (38.5%)	71.1 (38.5%)	71.7 (31.1%)	65.9 (30.7%)	72.0 (26.0%)	75.7 (32.7%)	70.0 (38.0%)	68.7 (30.5%)	74.3 (29.5%)
	極端群	57.3 (24.2%)	69.5 (25.0%)	68.5 (23.0%)	59.5 (20.6%)	65.5 (34.8%)	70.5 (18.0%)	64.9 (25.9%)	64.5 (23.3%)	67.2 (22.9%)

表 10 において家族機能分類の 3 群共に大学生において自立度の値が高く、成長過程と共に情緒的自律性が発達してくるものと考えられる。その上、大学生におけるバランス群と中間群の自律度がより高く、極端群がより低い傾向にあり、家族機能が自律度の発達に関連していることが可能性としてあげられる。

しかし、C中とD高、特にC中において、バランス群よりも極端群の自律度が高く、他校とは異なる結果を得た。家族機能のうち、凝集性が「健康な家族」、「家族幸福度」、「満足度」などの尺度とリニアな正の相関をもつとして尺度としての評価が指摘されている (Green et al,1991 ; 茂木,1994 ; 草田,1995) <sup>5)</sup>。表 3 から、C中の凝集性が著しく高いことがわかる。これらのことから、C中の極端群の自律度が高いことが家族機能の影響を受けていることが十分に推測される。

情緒的自律性が大学生でより高いことから、成長過程に従って自律性が成長してくるものと考えられる。また、家族機能のバランス群と中間群で自律度がより高いことから、家族機能の安定が情緒的自律性の発達を促している可能性を示している。しかし、C中やD高のように家族機能分類の極端群に含まれ、その中でも凝集性の高い家族をもつ子どもたちの情緒的自律性がバランス群よりも高いことは、これらの学校が進学校であり、教育熱心な親たち等の特殊な環境因子が情緒的自律性の発達を促していることが推測されて興味深い。

#### IV. 結論

1. 家族機能は中学と高校の間で安定する。
2. 大学 1 回生の極端群の値が高く、一時的に家族の機能性のバランスを崩していると考え。これは、一人暮らしをしてまだ 1 年に満たないため、家族と離れて暮らすことによる安全面や精神面への不安をぬぐい切れないことにより、家族との情緒的なつながりを多く求めている結果であると推測する。大学 4 回生でバランス群が最高値(49.1%)を示した。成長するに従って家族機能は安定すると推測される。
3. 情緒的自律性は高校生と大学生の間に発達する。
4. 大学生では環境的要因 (一人暮らし) が自律を促していると考え。また、より多くの人と関わる機会が増えることや、親の教育や保護から部分的に解放された結果ではないかと考える。
5. 家族機能の安定が情緒的自律性の発達を促していると推測される。しかし、C中やD高のように家族機能分類の極端群の中でも凝集性の高い家族の子どもたちの情緒的自律性がより発達しているという特異な例もみられた。

#### V. 引用文献

- 1) 草田寿子・岡堂哲雄 1993 家族関係査定法 岡堂哲雄(編) 心理検査学 垣内出版 p573-581
- 2) Olson,D.H.,McCabbin,H.I.,Larsen,A.,Muxen,M.,& Wilson,M. 1985 *Family Inventories*. St.Paul,MN:Family Social Science,University of Minnesota.
- 3) 遠藤利彦・北島歩美・喜岡恵子 1994 青年期中期における自律性の発達と家族関係 聖心女子大学論叢 p47-51
- 4) Steinberg,L.&Silverberg,S.B.1986 The vicissitudes of autonomy in early adolescence.Child Development.
- 5) 草田寿子 1995 日本語版 FACESⅢの信頼性と妥当性の検討 日本カウンセリング学会 vol.28

p154-162

- 6) 草田寿子 1995 家族関係単純図式投影法の基礎的研究—家族関係査定法としての可能性— 日本  
カウンセリング学会 vol.28 p21-27